

第2回 国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会 議事録

日時：令和4年11月29日（火） 13:00～15:30

場所：仙台市役所本庁舎2階 第5委員会室

○司会

ただいまから第2回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を開催させていただきます。

私は、本日の司会を務めます文化観光局文化振興課の中井でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、資料の確認でございます。

本日の資料は、座席表、本日の次第、資料1から5及び参考資料となっております。資料の不足がございましたら、お申しつけください。

本日、港委員、本江委員、渡邊委員につきましては、オンラインでの参加となっております。また、梶奈生子委員から欠席のご連絡をいただいております。

会の成立に関してご報告いたします。本日は9名の委員にご出席いただいておりますことから、要綱第4条第2項に規定する定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

なお、郡市長は、本日は欠席いたします。代理として、文化観光局長の金子が進行させていただきますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、前回の懇話会ご欠席の委員の皆様をご紹介させていただきます。名簿順に私からお名前を申し上げますので、委員の皆様におかれましては、その場に着席のまま、お1人につき1分程度で簡単に自己紹介をお願いいたします。

初めに、垣内恵美子委員、お願いいたします。

○垣内委員

ただいまご紹介いただきました垣内でございます。

1回目の会議、所用がありまして欠席いたしました。

私は、政策研究大学院大学で文化政策を専門としております。国や地方自治体などの政府が文化的な活動、劇場も含めてどういうふうに関与するのかということを研究しております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会

ありがとうございました。

それでは、港千尋委員、お願いいたします。

○港委員

改めまして、多摩美術大学情報デザイン学科の港千尋です。

前回は、所用で欠席いたしまして失礼いたしました。

私は、情報デザイン学科というところで主に芸術祭やメディアアートについての研究を行っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会

ありがとうございました。

それでは、渡邊享子委員、お願いいたします。

○渡邊委員

よろしくお願いいたします。株式会社巻組の渡邊享子と申します。

私、普段は宮城県石巻市におりまして、建築だったり、不動産を通した事業展開をさせていただいております。仙台市との関わりとしては、昨年のスーパーシティ構想（準備検討会）の構成員に入れていただいたご縁から、こうした機会をいただいたのかなというふうに思っております。市民の目線からいろいろ発言させていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

ここで失礼いたします。

まず、港委員でございますけれども、本日、移動の関係で、14時から15分ぐらい接続できなくなりますので、ご了承いただければと思います。

また、渡邊享子委員に関しましても、所用につき、15時前後でご退室ということになりますので、その点ご考慮いただければと思いますので、何とぞよろしくお願いいたします。

○司会

お三方、どうもありがとうございました。

次に、本懇話会の運営について確認をさせていただきます。

本日の議事録についてですが、事務局が作成した議事録の案について、垣内委員、川内委員のお2人にご確認、ご署名をいただきたいと存じます。両委員、よろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

○司会

では、よろしくお願いいたします。

その他、運営に関することで皆様から何かご意見等ございますでしょうか。

（発言の声なし）

○司会

それでは、これから議事のほうに入らせていただきたいと思います。

これからの進行については、金子局長にお願いいたします。

○金子文化観光局長

それでは、皆様、本日どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、お手元の次第にありますとおり、意見交換の主なテーマといたしまして、本施設の理念について、本施設の目指す方向性と実現に向けた具体策について、青葉山エリアに立地する施設としての役割について、の3点を中心にご議論いただく予定としております。

その前に、初めに、前回の懇話会についてでございますが、前回は、複合施設の目指すべき姿や人材配置、人材育成の重要性などに関し、皆様から数多くのご意見を頂戴したところでございます。当日のご意見の概要につきまして、本日、資料1としてまとめさせていただいておりますので、後ほどご高覧いただければと思います。

続きまして、第1回懇話会からこれまでの間、本市において実施いたしました市民意

見の聞き取りですとか関係者へのヒアリング状況、それから、先日開催されました第2回青葉山エリアビジョン検討懇話会の議事要旨につきまして、それぞれ3人の担当の課長のほうからご説明させていただきたいと存じます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

文化振興課の佐々木と申します。よろしくお願いたします。

それでは、まず、資料2-1をご覧ください。

こちらの資料は、市民意見、それから関係者ヒアリングの結果についてのご報告でございます。

まず、1に記載いたしましたのは、市のホームページや市民の声として寄せられたご意見でございます。施設整備に期待するお声や整備場所に関してのご意見をいただいているところでございます。市のホームページでは、複合施設整備に関するご意見を引き続き募集しておりますので、懇話会の都度ご報告をさせていただきたいと考えております。

また、2には、9月25日に実施いたしました青葉山エリアに関する市民シンポジウムでの来場者アンケートの一部を載せておりますので、参考にご覧いただければと存じます。

また、3に掲載の市内の文化団体や県外の文化関係者にヒアリングを実施しております、その内容の詳細につきましては、資料2-1別紙にまとめておりますので、こちらも後ほどご覧いただければと思います。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

次に、1枚おめくりいただきまして、4番と5番でございます。

まず、4番、震災伝承関係者へのアンケート、ヒアリングを実施いたしました。まず①でございますけれども、3.11メモリアルネットワークメンバーということで、震災に関する伝承団体ですとか個人の皆様、そういった方々に本施設に期待すること等についてアンケートを取った結果をご覧のとおりお示ししてございます。

次に、②市内メモリアル施設というところでございまして、本室で所管しております（せんだい3.11）メモリアル交流館並びに荒浜小学校の職員に対しましてヒアリングを実施いたしました結果をお示ししてございます。

次に、5番でございますけれども、災害文化普及啓発チームへのヒアリングというところでございます。このチームでございますけれども、我々で災害文化の普及啓発事業を先行で実施しておりますが、そちらのパネルチームというところで、例えば音楽の力による復興センターの方ですとか、これまでメモリアル事業、伝承事業に携わられてきた方に対して意見の聴取というものを行ったものでございます。概要といたしましては、やはり震災や被災を知るというところ、あとは東北全体での本市の位置づけですとか、あとは未来に向けてという部分で、つくり込み過ぎず余白や柔軟性を持たせるといったご意見を頂戴しているところでございます。

最後に、もう一枚おめくりいただきまして、6番、市内コンベンション関係者へのヒアリングでございます。ヒアリングの実施団体といたしまして、ご覧の団体をお示ししてございます。そして、そこで寄せられた意見につきましては、以下のとおりでございます。このコンベンション関係の論点につきましては、後ほど資料5のところで改めて

詳細に触れさせていただきたいと思いますので、ご意見については後ほどご高覧いただければと思います。

資料2-1についてのご説明は、以上でございます。

○事務局（市川交流企画課長）

最後に、資料2-2に基づきまして、11月8日に開催いたしました第2回青葉山エリア文化観光交流ビジョン検討懇話会での主なご意見についてご報告申し上げます。

当日の議事といたしましては、資料1の(2)に記載の4点についてご議論をいただきました。その中でも、2点目の「エリアの特性と強み、課題」や3点目の「エリアのコンセプト、目指す将来像」、このあたりについて多くご意見を賜ったところでございます。

主な意見を2に記載してございます。まず、エリア全般に関することといたしまして、青葉山エリアという名称、あまり認識されていないので、今後幅広く周知していくことが重要だろうというご意見ですとか、また、将来の取組を考える上で、このエリアには天然記念物青葉山ですとか仙台城跡などといった史跡の存在が前提になるということを整理しておく必要があるのではないかとといったご意見をいただきました。また、その下、コンセプト、将来像に関することといたしましては、自然や歴史などこのエリアが有する価値を政宗公のまちづくりへの思いということを踏まえた上で伝えていく必要があるのではないかとというご意見ですとか、あるいは懇話会の資料の中で、コンセプトの考え方として、多様な過ごし方や楽しみ方ができるエリアであるという表現にしておったところ、多様なという文言の前提として市民が自然を大切にして歴史を守っていく、こういう思いがあることを入れたほうがよいのでは、などというご意見をいただいたところでございます。そのほかは、記載のとおりでございました。

担当からの説明は、以上でございます。

○金子文化観光局長

ただいま、各担当のほうから市民意見の聞き取りですとか、関係者のヒアリング状況についてご説明申し上げます。この件に関しまして、委員の皆様から何かご意見やご質問等ございますでしょうか。

(発言の声なし)

○金子文化観光局長

ありがとうございます。

それでは、意見交換のほうに進ませていただきたいと思います。

初めに、複合施設としての理念について及び複合施設の目指す方向性の実現に向けた具体策についてでございます。

まず、複合施設としての理念について、担当のほうから資料を説明させていただきます。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

それでは、引き続き、複合施設としての理念についてご説明をいたします。資料3をご覧ください。

資料3というところで、1枚でまとめさせていただきました。まず、目指す施設像についてでございますけれども、前回第1回懇話会の資料5の部分で、複合施設としての

目指す方向性ということでお示しをさせていただいた3点につきまして記載させていただきます。今回ご議論いただきたいのが、その上位に位置いたします基本理念の部分でございます。こちらでございますけれども、四角の中、本日あえて空欄とさせていただいております。その上に、吹き出しという中に、第1回懇話会のご意見から基本理念につながるであろうと我々のほうで考えましたキーワードの例につきまして並べさせていただいております。こちらでございますけれども、あくまで事務局からの例示、素材でございますので、このキーワードに関わっても関わらなくてもということで、本日は、委員の皆様から自由闊達なご意見というものを頂戴できればと考えてございます。

資料3につきましてのご説明は、以上でございます。

○金子文化観光局長

ただいま、複合施設の理念について資料をご説明いたしました。この件につきましては、先に次のテーマについての意見交換を行いまして、複合施設のイメージがより明確となった後に戻りましてご協議いただくという運びにしたいと存じます。

先に、複合施設の目指す方向性と実現に向けた具体策につきまして、まず、2名の担当のほうからそれぞれ資料を説明させていただきます。

○事務局(田中震災メモリアル事業担当課長)

それでは、続きまして、資料4についてご説明をいたします。

資料4でございますけれども、A3で3枚となっております。こちら、それぞれ1枚ずつでございますが、先ほど、資料3の中段でお示しいたしました複合施設としての目指す施設像の①から③それぞれにつきまして1枚ずつ、事務局からの具体策の案並びに他施設等の事例のご紹介を差し上げているものでございます。

まず、資料4の①、「誰もが集い、交流し、新しい価値を創造する場」についてというところで、まず5点、具体策のほうの例示をさせていただいております。例えば、この中でございますけれども、4番、市民活動を支援し、これからのまちづくりの担い手の発掘・育成の中で、事例といたしまして、せんだいメディアテークの事例を挙げさせていただいております。こちらにつきましては、後ほど本江委員のほうから事例紹介ということで触れていただく予定でございます。

さらにその下、5番、事業展開の核となる人材を育てるというところで、東京文化会館の事例をご紹介してございます。こちらにつきましても、後ほど梶委員のほうから、ビデオメッセージという形ではございますが、事業の中身について詳細をご報告いただく予定としてございます。

1枚目の最後でございますけれども、1の②のところに戻っていただきまして、一日中何かがあり、楽しめる場となるというところで、事例の一つといたしまして、富山県美術館の事例を紹介させていただいております。こちらは、屋上に「オノマトペの屋上」という子供でも楽しめる庭園を事例としてご紹介させていただきましたが、さらに付け加えますと、こちらの富山県美術館は、この横に富岩運河環水公園を設置してございまして、まさに我々が今後建てようとしている複合施設と同じく、水辺にある施設というロケーションも興味深い事例ではないかというところで、ご紹介をさせていただいております。

次に、おめくりいただきまして、②でございます。

こちらにつきましても、5点、具体策と事例をご紹介させていただいております。

まず、左側、1と2に関しましては、震災並びにこれまでの仙台市の文化芸術の土台を知るという部分で前回ご意見いただいたところを踏まえまして、事例の紹介等々をさせていただいております。さらには、3番のところでございますけれども、仙台がこれまで培ってまいりました文化芸術の土壌並びに数々の災害を市民と共に乗り越えてきた土壌、それらを発展させた上で創造的な発信を市民に行うというところで具体策等々をお示しさせていただいております。

次に、4番、地域課題へのアプローチ、5番の最先端技術につきましては、記載のとおりでございます。

最後に、③でございます。おめくりいただきまして、「ネットワークを形成し、市内外から人が訪れたいくなる場」でございます。

まず、1番といたしまして、広域から人を呼び込める価値を提供するというところで、本施設が全国並びに世界に向けてどのような価値を発信していけるかというところの案をお示しさせていただいております。

さらには、2番の周辺施設の連携、あとは4番の市内外の施設・機関とのネットワークの構築についてでございます。こちらにつきましても、前回の懇話会の中で、この施設だけで全てを完結させるのではなく、他との連携というのが重要であろうというご意見、頂戴してございましたので、そちらの点について触れさせていただいております。

最後に、3番、エリア外との回遊性の向上でございますけれども、こちらも具体策、案をお示ししてございますが、詳細につきましては、後ほど、こちら資料5のところでご説明をさせていただく予定でございますので、本資料につきましては高覧いただければと思います。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

次に、参考資料1-1から1-3についてでございますが、こちらは、先進的な取組を幅広く実施し、本複合施設の目指す方向性を考える上で参考とすべき文化施設でございます兵庫県立芸術文化センター、それから札幌市民交流プラザ、東京文化会館の事例をまとめております。こちらにつきましても、併せてご確認をいただければと存じます。

○金子文化観光局長

ただいま説明を行いました。

ここから、委員の皆様方の意見交換に移りたいと思いますが、最初に、本日ご欠席の梶委員から、東京文化会館の取組をご紹介いただくことを中心としましたビデオメッセージをお預かりしております。まず、そちらをご覧いただきたいと存じます。

○梶委員（ビデオメッセージ）

皆様、こんにちは。梶奈生子です。

本日は、あいにく仙台にお伺いすることができないため、ビデオメッセージにて参加させていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

第1回の会議で、仙台市のホールの方向性のお話を伺った際に、劇場法を踏まえた二層的な劇場が明確にイメージできました。今日は、描いている劇場の姿を実現するために欠かせないポイントについて、東京文化会館の事例を写真でご覧いただきながら、日

頃の経験を踏まえてお話ししたいと思います。

仙台市民の皆さんは、日頃どのようなときに劇場に足を運んでいらっしゃるでしょうか。平日の夜や休日の昼間にコンサートなどがあるとき、これは一般的な劇場の姿ですよ。より響きのよい劇場で質の高い公演を市民に提供するのは、ミッションの一つとして重要なポイントです。しかし、音楽ファンや演劇ファンなどの関心がある人たちだけをターゲットにして運営する時代は終わり、現在はあらゆる人々にとっての居場所として機能していくことが求められています。劇場で日々繰り広げられる公演に足を運んだことがなく、もしくは様々な理由で足を運ぶ機会がなく、どのような世界か知らない人たちにとっても欠かせない場所であるべきだと考えられています。劇場を鑑賞のために人々が通う平日の夜や休日以外の時間にいかに活用していくかが大きな課題となります。

あらゆる人々が日常的に集う場所になれば、隣接する中心部震災メモリアル拠点で日々発信される防災意識を身近に感じることもつながるのではないのでしょうか。そのような場所になるために、次代を担う子供たち、超高齢社会への対応と共生社会、そしてそれを支える体制構築についてご提案したいと思います。

鑑賞で得る感動は代えることのできない心の栄養ですが、それだけでは劇場の扉が誰にでも開いているとは言えません。あらゆる人々に適切なコンテンツを提供していくのが今の劇場の姿です。例えば、乳幼児をはじめとした未就学児は、一般的なコンサートには入場できませんよね。現代は核家族化が進んでいますので、まだ言葉の通じない乳幼児と一日中時間を過ごすお母さんの孤立も課題となっています。乳幼児を連れて行く場所が公園などに限られて、行き場所を探しているという話もよく耳にします。そのようなお母さんたちのために、ゼロ歳児から参加できる音楽ワークショップを利用者の少ない平日の午前中に実施するのはいかがでしょうか。

ワークショップを通じて親子の絆をより深めることができたり、参加者同士が親としての苦労を共有したり、気兼ねない楽しいひとときを過ごせたと、参加したお母さんからお話を伺うことが度々あります。子供がもう少し大きくなると、実際に子供たち自身が参加することができます。小学生になったら、大人と同じような即興演奏ができたり、ちょっと難しいリズムに乗って合奏だってできるようになるでしょう。このように、成長に合わせて参加できる作品をたくさん用意して、劇場に子供の頃から通うことが当たり前の習慣になっていけば、10年、20年先には劇場に通うことが日常になっていくのではないのでしょうか。定期的に通っても楽しめる仕組みをつくることが重要です。

例えば、元気な高齢者の皆さんが能動的に参加、体験する場所をつくること、超高齢社会の現代は、単独世帯も多くなっています。高齢者の孤立やひきこもりも課題ですよ。高齢者が社会とのつながりを見だし、生きがいを感じたり、そのときに出会った人たちとの共通の達成感を感じたりとアクティブな生活を送る場所の一つになっていくでしょう。

障害があるからと劇場に通うのを遠慮する必要はありません。安心して参加できるコンサートを企画することもできます。外出が難しいのであれば、劇場から施設に伺うこともできます。認知症の方々と介護の方たちとの音楽の共通体験を通して、よりスムーズなコミュニケーションに発展するとも伺いました。このような事業を実施する時間帯

は、ちょうど中心部震災メモリアル拠点の開館時間と合致すると推察しています。様々な人々がそれぞれの施設に集うきっかけになるとよいですね。

舞台芸術には、音楽やダンス、演劇もあります。それらを鑑賞するだけでなく、鑑賞作品に連動した参加型ワークショップの開催はいかがでしょうか。例えば、オペラは総合芸術ですから、音楽、美術、演劇、ダンスなど様々な芸術的な要素があります。音楽に参加することはもちろんですが、音楽が苦手な子供でも、工作なら得意かもしれません。劇場が主催するオペラ作品に関連する工作ワークショップに参加した子供たちが作った工作作品の展示を見に来る機会と、その公演の鑑賞をセットにしてみます。劇場とは縁がなかったかもしれない美術が好きな子供たちの初めてのオペラ体験は、子供たちの成長の新しい可能性につながるかもしれません。

このように、劇場が用意できるコンテンツは多彩で、あらゆる人々のニーズに応えることができるものだと思います。

ご提案したワークショップを実現するために大切なことは、単なる既存のワークショップ作品の買物ではなく、劇場自ら考え、ニーズに併せて提供していくことです。仙台の劇場ならではのオリジナルで、ここにしかないものを提供することで、より市民が親しみや誇りを持って参加できる環境が整い、そして、それこそが劇場の魅力になるのではないのでしょうか。一人一人のライフステージに寄り添い、いつでも、いつまでも集うことができる劇場として様々な事業展開をしていくことが重要です。このような事業を展開するに当たっては、劇場の体制を構築することはもちろんですが、様々な機関との連携が重要です。

例えば、仙台フィルハーモニー管弦楽団、すばらしい演奏家たちには、様々なノウハウがあるはずです。新進演奏家の育成にも積極的に取り組んでいらっしゃるのです、その若い演奏家と一緒に新しい作品を生み出していくのはいかがでしょうか。近隣の美術館や博物館とは、音楽以外の芸術とのコラボレーションの可能性があります。展示する作品と同時代の音楽作品のコンサートを実施して、美術や歴史の愛好家にも音楽の魅力を伝えることができるかもしれません。

教育機関との連携では、学校に生の演奏や音楽ワークショップを届けることができます。家庭では鑑賞する機会のない児童にとっては貴重な経験になるでしょう。福祉機関との連携では、特別支援学校でコンサートなどを開催することもできるでしょう。聾学校の児童たちが一緒に行った音楽のワークショップを楽しい時間だったとメッセージを下されたこともあって、お互いを理解し合う一歩となりました。そのほかに、周辺や都心部の商業地域とも連携して、お互いに支え合うことも必要です。商店街のイベントとのコラボレーションなど、劇場を中心にアウトリーチ活動も活発に行える可能性に満ちています。

このような事業を展開するためには、何よりも人が重要です。参加型事業のワークショップをつくっていくアーティストたちも、地元の若手や仙台フィルの演奏家などの専門家を起用して育成、支援する仕組みづくりが必要です。劇場で働く職員自らが、管理者としてだけでなく、制作者として、舞台技術者として活躍し、オリジナル作品を提供し続けていくことが劇場の活性化につながります。そのためには、できるだけ早く核となる優れた人材を確保、雇用し、事業計画や設計段階から関わり、市民が参加する環境

を一緒に考え整えていくことが必須です。そして、その成果を大学などと連携して研究し、広く発信していけるとよりよいと思います。

人々の拠点となる劇場は、来場してくれる人を待つだけでなく、自ら様々な機関に働きかけ、巻き込みながら事業を展開する必要があります。長期的な視点で劇場で働く人々を育て、劇場自身も市民とともに育っていただきたいと思っています。

以上です。長い時間、ありがとうございました。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

東京文化会館さんは、我が国で最も歴史の古いホールの一つですけれども、今、ビデオを拝見いたしましたして、一人一人のライフステージに寄り添うという形で積極的に様々な新しい活動をされているということが大変よく分かりました。大変参考にさせていただきたいと思います。

それでは、続きまして、本日、本江委員からも複合施設の参考となる事例についてご紹介されたいという上でのお話をいただいております。本江委員、よろしいでしょうか。お願いいたします。

○本江委員

本江でございます。

今、梶委員からのビデオを見せていただいて、出来上がったものを消費するだけじゃない、みんなで新しいものをつくる、それもすごい大きいレンジでやられるというのを見て、大変すばらしいな、と思ったところでした。

僕からは、メモリアルのお話ですけれども、前回、既に建ち始めている、オープンしている既存のメモリアル施設を見ますと、展示施設があって、震災の被害状況を示して、それを映像で見るコーナーがあって、ディスカッションのできる会議スペースがあって、資料コーナーがあって、献花台があって、といったまとまったパッケージのようなものが幾つかできたことで、イメージがある意味固まりつつあるかもしれないですが、仙台市がこれから新しくつくろうとするものはそれとはちょっと違う、災害文化の創造ということを謳っていて、「かの震災」「ザ・震災」を伝承していくということだけでなく、来るべき次の震災、これからの震災について応答していけるような文化を持った市民をつくる、そのための文化をつくるということなので、もうちょっと違う建築のタイプなのではないかということで、私、建築が専門ですので、こんな感じの建物じゃないかというのを幾つかご紹介差し上げたいと思って、今日はお時間をいただいております。

これから幾つか新しいタイプの市民施設、新しいタイプの文化創造施設について、こんな感じかなと思うものをお示ししますが、規模がまちまちですし、普通の意味では図書館であるとか、美術館であるとかという、建物の機能で言えば違うんですけれども、その基本的な構えというか、構造というか、そうしたところに注目しながら見ていただければいいなと思っております。

4つぐらい例をお見せしたいと思います。1つ目は我々が「せんだいメディアテーク」。これは、図書館と生涯学習施設の合築と言ってしまうと、大変普通な感じなんですけれども、それを新しいタイプの、建築の形式としても画期的でしたし、それをオープンで緩やかにつないでいって、いろんな活動が起こるような場を2001年に示してい

て、やはりせんだいメディアテークがこの後の市民文化施設に示した可能性というのはものすごく大きいもので、多くの施設がメディアテークの子供と言っていいように思います。

メディアテーク、皆さんご存じのとおりですが、これが建築の平面図なんだというのが、最初でできたときは、何でこれが建物の図なの、というぐらいの見慣れない形をしておりました。オープンなスペースがずるずるとつながっていついて、しかも変な柱で建っていて、透けて見えているというような形で、壁のないスペースがずっと続いていく。これができたときは、とてもじゃないけれども、普通の市民には使えないだろうと、すぐに小部屋に分割にされてしまうのではないかとというふうに陰口を言われたりもしていたんですけども、20年、当初のこのコンセプトをキープしたまま使われ続けているというのはすばらしいことだと思います。

震災に対応して、「3がつ11にちをわすれないためにセンター（わすれん！）」を素早くおこして、そのためのスペースを柔軟に用意しながら展覧会をやったり、いろんなメディアを使った活動を市民と一緒に展開するというこの実績を広げてきております。そのための設備や空間が使われるし、その使い方を教えてくれる人たちもいるというような場所になっていて、市民の自主的な活動を支援するというこのためにつくられた施設です。

次に、これもメディアテークの子供と言っても差し支えないと思いますが、武蔵野市の武蔵野プレイス。かわいらしい形をしておりますが、これも、図書館と生涯学習支援施設、青少年活動支援機能が組み込まれた建物なんですが、いろいろな必要な部屋があるじゃないですか。それを一旦ばらばらにして、混ぜて置き直して、それを縫うように人が動き回れるようになっていきます。なので、別々になっていたら会わなかった人たちが、この中で擦れ違ったり、会ったり、あらこんなこともやっているのね、ということが互いに見えるような形になっていて、アクションの連鎖が起こる、折り合わされたような場所として、気づく、知る、参画する、創造するというふうに言っていますが、これも文化の創造のためには必要な機能で、これらを流動的な場の中に置いていくというのはイメージとして近いんじゃないかと思います。市民活動の支援で、部室のようにロッカーが置いてあったり、青少年のスペースも、図書の閲覧室という、黙って本を読んで、という感じになっちゃうんですけども、軽い運動ができるスペースとか、音を出すことを前提にしたスペースなんかも組み込まれていますし、それらが流動的につながっていて、いろんなところに居場所を見つけながらいられる。物を食べてもいいスペースなんかもつくられていて、それが居心地のいい場所、行ってみようと思わせるような場所になっています。

3つ目は、都城市立図書館で、これも、都城で都心の空洞化が激しくて、手前にメインストリートがあって、でっかいデパートがあったんです。仙台で言えば藤崎のような老舗のデパートがあったんですが、残念ながら閉店しまして、まちの真ん中にでっかい空き地ができちゃって、それをどうしようかということで、みんなで考え、建てたのがこの一連の施設です。

子育て支援センター、仙台で言う「のびすく」みたいなのが入っているのがデパートの本館の跡地に建っていて、後ろにまちなか広場というスペースが取られていて、

まちなか広場の左右に昔からある映画館と、新しくホテルができたりして、さらにその奥にあるのがこの図書館。昔のデパートの新館として建てられたものだったので、もともとショッピングセンターなんです。それを居抜きで改造して図書館にしたということで、このでっかい時計塔と天窓のある吹き抜けのスペースというのが、ショッピングモールだと思えば自然なんですけれども、図書館で最初からこれを造ろうとすると、ぜいたくすぎて無理だろうという、そうした場所になっています。

これも、ショッピングセンターらしいフラットなスペースだということを生かした図書館になっています。本でぎっちりというよりは、カフェがあったり、すごくオープンなスペースで、本に関わる執筆のワークショップをやったり、映像をつくるスペースがあったり、このオープンな場所にいろんな人が行き交いながら活動ができるようになっている。ティーンズスタジオとかファッションラボというようなちょっと普通の図書館にはないような、さらにお弁当コーナーというのもあります、そうしたスペースが用意されています。

入ったすぐのところにある、半分会議室のようなワークショップスペース、オープンで広がっていますが、ここにもものを作ったり、本を書いたり、雑誌、最近「ZINE」といって小さい雑誌を自主制作するのが流行っていますけれども、そうした活動のためのスペース、図書館の職員がその活動をサポートするスペースがあったり、プロジェクトの活動を募集して、そのための拠点がガラス張りの部屋の中にあったり、先ほど申し上げたファッションラボもある。先ほど、劇場だけれども絵を描いています、コンサートだけじゃなくてオペラの舞台の背景をつくりますみたいな活動のご紹介がありましたけれども、これも図書館ですけれどもテキスタイルの何かをつくったり、工的なことをすると。ミシンもいっぱい置いてあるスペースもあって、本を読むだけではなくて、知的な刺激を受けて、それを実際に手で作ってみる、それをみんなでやるというような活動にすぐにつないでいけるようにするというのは、今の市民施設の大きな流れになってきているかと思います。

最後ですけれども、八戸市美術館です。昨年オープンしたばかりで、規模はそれほど大きくありませんけれども、駅と中心地の間にできました。八戸市は、大きくはないんですけれども、美術館を早い時期から持っていて、コレクションもお持ちだったんですが、何かを改修した建物で、正直美術館としては厳しい建物だったので、それを新しく建て直すことにしたそうなんですけれども、手前に大きな庭があって、そこを使えるようにして、お祭りなんかのときにもこの広場を使うということです。面白いのは、室内はそれなりに多く区切っているんですけれども、特徴的なジャイアントルームという、入るとすぐものすごくでっかい体育館みたいなスペースが出てきます。

そこは無料で入れて、ご飯食べたりしてもよくて、ワークショップをやったり、何もやっていないときは市民がいろいろ勝手なことをして過ごしていると。メディアテークの1階のオープンスペースと近い感じだと思うんですけれども、そうしたスペースがドーンと取られていて、その奥に展示室群が並んでいて、美術館になっている。そこも、展示室と通路と裏方の部屋というように明瞭に分かれていなくて、部屋同士がずるずるとつながっていて、ただし白い部屋とか、黒い部屋とか、細長い部屋とか、キャラクターがついた部屋になっていて、ある場合はこの部屋を展示室に使ってこっちを楽屋にす

るとか、ある場合はこっちでワークショップをやってこっちで展示をするとか、すごく複雑な使い方ができるようなプランニングになっています。

それを運営する仕組みをつくるということがこの八戸市美術館の重要な課題になっていて、今、チャレンジをしているところかと思います。

たとえば開館前から、町なかに「アートラボ」というのをつくって、どんな活動をしたらいいかということを中心に市民と一緒に考えることをやってきたというのは、我々もぜひやるべきことだと思いますし、始まった後も市民参画の継続的な「アートファーマー」と呼ばれる一連のワークショップをやったり、建物が面白いので、その建物のツアーガイドをボランティアと一緒に養成する講座をやったりしておられます。あと、青森は、非常にユニークな現代美術の美術館が5つもあって、それらをネットワークしている。宮城もミュージアムネットワークがあり、それに当たるものですが、非常に活発な連携をしておられます。

これが、先ほど言った特徴的な空間のジャイアントルーム、巨人の部屋ですけれども、何もやっていないともものすごく大きながらんとした部屋です。だけれども、いろんな仕掛けで、すごくたくさんの方の利用の仕方を可能にしている、そこで展示会をやったり、パフォーマンスのイベントをやったり、いろんなことをできるようにしています。

今、4つ例を申し上げましたけれども、我々のメモリアル拠点で、何か展示をして、それを見て出来上がったものを学びに来る、受け取りに来るための場所というよりは、震災についての知識をみんなが持ち寄って、それを整理して、さらにみんなに伝えていくためのやり方をみんなで考えるような場所だというふうに考えると、決まったスペースがカチッとつくられて並んでいるだけではなくて、オープンで、生成的で流動的な空間になっていて、それらをいろんなタイプの人、いろんな違う能力を持った人が行き交いながら作業をするような、そういうような場所をイメージできるかというのではないかなと思いました。図書館や美術館や、今回は劇場ともセットですけれども、その中で災害文化というテーマはありますけれども、その中でいろんな人が自由に活動できるような場のイメージというのを共有できればと思って、4つ、建築の紹介をさせていただきました。

私からは以上です。ありがとうございます。

○金子文化観光局長

本江委員、ありがとうございました。

それでは、目指す方向性と実現に向けた具体策について、皆様からのお話を伺いたいと存じますが、大変項目が多岐にわたりますとともに、ただいま、梶委員と本江委員から大変示唆に富む事例紹介もいただきましたので、各委員から2回ずつお話いただく形、一巡して、さらにもう一巡という形で進めていきたいと存じます。

初めに、港委員が14時頃に一旦退席と伺いましたので、最初に港委員からお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。お願いいたします。

○港委員

よろしく申し上げます。

ただいま、梶委員と本江委員のほうから大変具体的な事例の紹介と提案をいただきました。今日は特に資料は用意していないんですけれども、2点ほどこの間説明をいただ

きまして考えたことを申し上げたいと思います。

1 つは、2020年度以降にこうした計画と一緒に考えていくということ、これは言うまでもなく新型コロナウイルスの世界流行以降の、そしてロシアによるウクライナ侵攻以降の世界の中で芸術と社会の関係を考えていくということにほかならないわけです。ですので、現在様々な領域でリセットという言葉が使われるようになっていますが、我々もそういう意味で幾つかの再定義を考えていくべきじゃないのかというふうに思っています。

アート領域で仕事をしている、そして大学で研究活動をしている立場からすると、1 つは、特に音楽施設にとっては、オーディエンスの捉え方をもう一度考える機会になるだろうと思います。梶委員のほうから、様々なライフステージに寄り添うことのできる施設、そしてそのための事業展開を考えていくときの幾つかの条件という紹介がありましたけれども、私は、そのことを、言葉を変えると、それまで劇場に来てすばらしい演奏に触れるという意味での聴衆、それを広義のオーディエンスとすると、これからのオーディエンスというのは、言葉の元の意味に立ち返って、耳を傾ける人という意味、つまり、音楽に耳を傾けると同様、他者に耳を傾けると。

梶委員のご紹介の事業の一つは、やはり子供が大人に耳を傾けたり、その逆に高齢者が子供に耳を傾けたり、あるいは障害を持った人の話を聞いたりというふうに、そのことと音楽を鑑賞する人の間に壁はないということだと理解しました。ですので、その意味で、パフォーマンスや音楽や演劇やそうした作品に触れる、耳を傾けることと東日本大震災で起きたこと、記憶に耳を傾けることの間には有機的なつながりというか、その間に壁をつくらないということですね、そういう意味でのオーディエンスの再定義ができると思います。

そういう意味で、先ほどの本江委員のご紹介にありました武蔵野プレイスが別々の施設の間に相互のコミュニケーションが生まれるような、そうした建築ですよ、八戸市美術館の非常に大きな部屋というのも、通常では考えられないんですけども、そこにあらゆる市民、そしてそこを訪れる人が入って過ごすことのできるという、こうしたハードウェアが人間のアティテュードというんですか、人間の態度を育てていくという、そういう視点が重要なんだろうなというふうに思いました。

2 点目は、それと直接関係しているんですけども、平和の再定義ということになるんじゃないかと思います。この施設は、直接的には震災のメモリアルということになるんですけども、しかし、それは当然ながら仙台や宮城県だけではなく広域の大震災全体の、しかも仙台に造られるわけですから、そういう意味では、数々ある施設のネットワークの中心に、要になるような存在が期待されているのではないかと思います。そういう意味では、本江委員の話に、これからの震災にどういった心構えをすべきかと、その震災というのは、恐らく当然これは日本列島だけの話ではなく、太平洋、そして他の地域も含めた全ての震災のリスクのある地域にとっても参考になる、訪れるべき施設になる、そうした役割を担わざるを得ないんじゃないかと思うわけです。

そうしたときに、かつて戦争と平和という2つの言葉でくくられて理解されてきましたけれども、今日の平和学を考えてみても、その平和は非常事態の平和に対する平和だけではなくて、日常の中での平和、そこには様々な抑圧や既に存在している不公平や不

正義に対して市民がどのように向き合っているのか、そこまで含めた平和というふうに、現在では概念そのものが変わってきているわけです。ですので、こうした震災メモリアルも広義の平和構築の一環と考えられますので、梶委員が述べられていたような様々なプログラムの中には、平和構築の一環としての防災そしてメモリアルの考え方、これが組み込まれるといいのではないかと思います。

最後になりますけれども、こうした懇話会を通して、恐らく実際の建物の多くの前に様々な準備、プレプログラムが行われることだろうと予想します。その場合重要なのは国内外での連携にあるわけですが、例えば、仙台の場合は、日本の幾つかの都市と、オーディエンスやそして平和教育や防災教育などを通しての連携が生まれていくといいんじゃないかと思います。個人的には、昨年来、札幌のアーティストや音楽関係の方と勉強会や研究会を続けておりまして、札幌のK i t a r aというのは、日本、世界に誇るべきホールだと思いますけれども、そうした施設の取組、あるいは、平和ということだと、やはり広島、そして海外、特に近隣国との長い時間、多くの積み重ねがある福岡市ですね、そうした3つの都市は、仙台の取組にとっていろんな形で有益な話を聞けるのではないかなと思っています。

ちょっと長くなってしまってますみませんけれども、私からの感想を含めまして、ご意見としたいと思います。

以上になります。ありがとうございました。

○金子文化観光局長

港委員、ありがとうございました。

それでは、一旦会場のほうに戻りまして、ご着席の順にお話しただければと思います。

初めに、川内委員からお願いしたいと思います。

○川内委員

川内です。どうもありがとうございました。

今、事務局のほうからお示しいただいた資料4、それと本江委員と梶委員からいただいたご報告を大変刺激的に伺いまして、いろいろ考えるところがありました。いくつか考えたところを述べさせていただきたいと思います。

1つは、この複合施設については、基本構想ができたとしても、具体的な施設として出来上がるまでには時間がかかると思います。恐らくは、震災20年ぐらいのタイミングにできてくるのかなというふうに考えますけれども、そうすると事務局が提示した②「仙台を知り、磨き、仙台オリジナルの発信につなげる場」という中で触れられている、仙台の災害文化を考える上では、世界的な防災枠組である「仙台防災枠組」というものは大変重要ですが、実際に施設が完成するのは、この「仙台防災枠組」が終わる2030年ぐらいのタイミングになると思います。そうすると、「ポスト仙台防災枠組」の中で、仙台市がどのような災害文化をつくっていくかというのを考えるべきなのかなと思います。

この仙台防災枠組は、2013年に仙台で開催された「国連防災世界会議」で採択されたものですが、現在、SDGs等も含めて、今後の世界的潮流としては「誰も取り残さない」、「全ての人に関わっていく」ということが重要だということになっています。

そういう意味で言うと、先ほどの梶委員からのビデオメッセージであった「あらゆる人に開かれていくと、あらゆる人が集う」、また本江委員のお話でも「あらゆる人が集まれるような建物を造る必要がある」という、そういう意味での具体的事例をお聞かせいただいて、すごく勉強になり、そのような施設が必要になるだろうというふうに思います。

そのことについて、私は歴史家ですから、過去から現在、未来という時間軸で物事を考える癖がついておりますけれども、これまで、そして現在の仙台で行われている歴史、言い方を変えると、仙台市民の積み重ね・歩みに立った上で、この災害文化は創造される必要があるであろうと考えます。そういう意味で言うと、この新しくできる複合施設という空間の中には、「これから」という視点とともに、「これまで」という視点が必要になってくるだろうと思います。つまり「これまで」の活動があり、そして「これから」の仙台の文化があるという、そういうストーリーが具体的に見えるような仕組みが必要かなというふうに考えました。

そういう意味では、事務局にお示しいただいた例示②の2の中の文化芸術分野における先人の功績というところで、「海鋒義美先生の功績を顕彰する会」の話が載っておりますけれども、こうした仙台の音楽文化をつくってきた海鋒さんのような方を知り、そういうようなものを踏まえながら新しい芸術文化をつくっていくような仕掛けが、この施設の中に何かできればいいなというふうに思いました。

それと同時に、この青葉山という土地の特性を活かすことが必要です。これは梶委員がお話しされた、東京文化会館がある上野公園エリアが非常に参考になると思うんですけれども、単に青葉山にいろんな施設が集まっているというだけではなく、青葉山にある施設をより有機的に連携させ、その連携のなかで複合施設の在り方を考えていくということが必要になるだろうというふうに思います。

その上で、やはり僕がちょっとこだわりたいのが、この施設の基本的な軸についてです。確かに本江委員がおっしゃるように、この施設は単なる伝承施設ではない、これからの文化を創造する施設であるというところには私も大いに賛同しますが、一方で、やはりこの施設がメモリアル拠点と音楽ホールを複合する施設としてできたとしても、その起点は3.11という出来事にあるということを実に軸として据えていく。この軸をちゃんとしておかないと、一体この施設は何なんだ？ということが見失われていく危険性があります。こうしたことは5年・10年という、震災の記憶を持っている今の人がいる時間のスパンではなくて、30年・50年・100年という、震災の記憶や経験を共有しない人たちが多くなっていくに従って、そうしたことが将来的に見失われかねないんじゃないかということです。だからそこは理念としてきっちり位置づけたいなというふうに考えています。

その上で、本江委員がおっしゃった、「みんなで考える場所」としてのこの施設を作る、そこは大いに賛同いたしますけれども、一方で、そういう場としてつくと同時に、施設の持つ「機能」の問題を少し考えたいと思います。今回の事務局からの案では少し後景に退いたかなという感があったんですけれども、中心部メモリアル拠点にはアーカイブ機能を持たせるといった話が、これまでの答申でもあったと思います。そのことについて、仙台市では、既に、先ほど本江委員のご紹介であった「わすれん！」もそうです

し、同じメディアテークにある仙台市図書館の「3.11震災文庫」がありますけれども、単に「場」があるだけでは、特に長い時間が経過した場合、みんなで考える・語るというのはなかなか難しいと思います。例えば震災のときの避難生活で使ったモノがあったり、そのときに書かれたチラシがあったり、そういう具体的なものがあると、「あのときはこうだった」みたいな話が始まったりするわけです。だから、いわゆる震災のときの日常性を示すものというんですか、そういう記録とかもの、そういうものをまさにアーカイブするような機能というのをこの施設で持たせられないかなというのを考えています。

というのも、一人一人の日常の記憶というのは容易に失われる可能性が高いからです。前回の懇話会の中では、一人一人の震災経験を大事にできる施設が必要、みたいな話があったと思うんですけれども、震災体験って多様ですから、全員の体験を施設の中で掘り取ることは難しいです。だからこそ、個々の体験を喚起させるような場である必要があります。ただし、個々の体験は、震災という「非日常の日常」という、ちょっと語義矛盾の言葉ですけれども、その中に個々の震災体験があったと思うんです。こういう日常性というのは、結局、容易に失われるものです。例えば、現在、新型コロナの流行が続いていますけれども、100年前の「スペイン風邪」の日常を、一体どれだけの人の「非日常の日常」の記憶として伝えられ、現在の私たちまで受け継がれたかという、私たち人類はほとんど忘れてしまっていたわけですよ。つまり、そういう日常性というのは容易に失われるわけです。

でも、一方で、日常的に身の回りにあったものを見ることで、人は日常性を思い出す。つい先日、東北歴史博物館で「欲望の昭和」という、昭和の暮らしをテーマにした展示がありましたけれども、例えば当時の部屋の様子とか、ポスターなどを見ると、その当時の「くらし」をみんな思い出すわけです。思い出すと、そこで会話が生まれます。話す場があると会話が生まれる。そういう震災時の時の「非日常の日常」を示すようなモノについては、現在、仙台市図書館などが震災記録の収集をしたりしてはいますけれども、記録資料以外の「モノ資料」を集めてアーカイブする機能は、現在、宮城県では非常に弱いです。隣の福島県の方は大分進んではいるんですけれども、宮城県では弱い。そこを何とかこの施設の機能に組み込むことはできないか。そのことによって、人が集まる場をつくと同時に、人々がそこに集まって語り出す仕掛けや機能がつくれるのではないかと、というふうに考えました。

いずれにせよ、この施設というのはみんなが集まる場であると同時に、みんなが集まって語り出すきっかけをつくる機能、そういうものを持たせる必要がある。それともう一つは、そのための人材の配置ですね、そこが必要になるかなということを考えました。すみません、長くなりましたけれども、以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、順ということで、次に垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員

前回議論に参加できなかったのですが、少し見当違いなこともあるかもしれませんが、私のほうからは、今、何をするためにこの場所に空間を、仙台市が公的な投資をして将来

世代に残そうとしているのかという観点から、幾つかコメントをさせていただきたいと思います。

なぜ今か、というと、やはりデジタル化、非常に進んでおります。どこでも、誰でも、いつでも、そして非常に安価に芸術や文化、そういう鑑賞機会を得ることが今、いろいろな形でできている中、最近、Z世代というのもありますけれども、何というんですか、最初にアートに触れるのが自分のお部屋のスマホでの遭遇であるというような方々も爆増している中、なぜこのライブの空間が必要なのかというところから始めたいと思います。

世界的な潮流としては、やはり劇場、ライブの劇場というのは非常に今、厳しい状況に置かれていると。コロナもあったということもありますけれども、長期的なトレンドとしても、やはりデジタル化の波の中でこのライブがどういう価値があるのか、というところから問われている部分があります。そうはいつても、いろいろな調査をしますと、やっぱりライブへのニーズって非常に強い、根強いものがあります。同じ時間、同じ空間をほかの人と共有することによって初めて生じる価値もあるというようなことも改めて認識されているし、ずっとコロナが終わってもオンライン続けるかということ、そういう方は非常に少ない。ライブへのニーズが根強いということも1つ分かっています。

また、一方で、このライブに来る方、いろいろなところで、鑑賞者とか、入場者とかという形で言及されていますけれども、劇場活動ってそういう来の人だけに価値を与えるものではないというのは、私たちの調査でも非常にはっきりした形で、数字で取れています。それは、なぜかと言うと、自分は来ないけれども、ご家族の方々あるいは友人の方々が劇場に行って楽しんでいるから、それはすばらしい施設であるという認識もありますし、将来世代の方々、将来世代の子供たちにやはりこういう施設を残しておきたいという強いニーズというのがあります。こういった人々の思いを考えると、やはりライブの空間をつくるということは非常に重要なことだろうというふうに思っています。

今、私がいろいろ説明しているのは、メモリアル施設のほうは私の専門ではないものですから、どちらかということに劇場に偏った形でのコメントになってしまいますが、やはりそこにはニーズがあると。そのニーズに応える必要がある。そのニーズ、つまりそこにそれだけの物理的な空間を設置するというのは何なのかということですが、何をしようとするか、その中でどんな活動をするかによって必要な空間って決まってくるんだろうなというふうに思っています。

以前、私も参加させていただきましたが、劇場に関する懇談会のほうでは、2,000席ぐらいの非常に音響施設もいい、音楽ももちろん高度なレベルで聴くことができ、かつ多様な使われ方もできる、そういった施設が多分仙台市の市民の方々には必要なんだろうというような結論になっているかと思います。それで、何で2,000席かということ、やっぱり国際コンクールとか、せんくらとか、それから仙台フィルとか、そういった活動を念頭に置くとやはり2,000席が必要だろうと。高度な、音楽的な、音響施設も備えたそういうものがあるからこそ仙台フィルとかコンクールとかが十分にできるということがまず1つあるかと思います。

そのほかに、じゃそれだけでいいのかということ、劇場法にもうたわわれていますけれども、新しい広場としての市民の様々な活動ニーズに応えるということも大きな新しい役

割だというふうに思われます。実際、これは、劇場法ができる前からもういろいろな劇場でそういう試みはありました。例えば、神戸文化ホール、非常に広い、もう50年たった文化ホールですけれども、あそこは、今、いわゆる最先端の機材をたくさん使ったそういう舞台をかけるにはちょっと老朽化し過ぎているという施設なんですけど、実はそこで育った観客というのは、最初は観客でやってきた、それからセミナーに参加するようになって、その人たちが実は自主的に活動をどんどん広げていって、その人たちが実はスタジオなどを借りて、自分たちで借りていろいろな活動をするということがもう既に起きています。

そういった活動に対するニーズというのは非常に高く、というようなことも確認できていますし、来年オープンですか、水戸の文化会館、ここは市長さんがもう力を入れて、午前中は病院帰りのお年寄りがちょっと休んで、昼はベビーカーを引いたお母さんたちがママランチをして、午後の早い時間帯は中高生が宿題をやったり友達とだべったりして、夜は大人の時間、みたいなことをずっと説明されていて、来年オープンしてそうなるかどうかというのはぜひ注視したいところですけども、そういう多くの方々が劇場が提供するサービスだけではない様々な使われ方をもう既にしているし、そういうものを目指して施設もできているということもあります。今つくるからこそ、これまでの劇場の状況をよく確認して、仙台市民の方々のニーズに合った、そういうきめ細やかな活動、サービスが提供できるようなそういう施設をぜひつくっていただきたいと思います。

私は東京出身なんですけれども、やっぱり仙台フィルってなかなかクオリティー高く、非常に優れたコンテンツだろうと思うんです。マネジメントについては、いろいろ思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、こういった今まである、仙台が育んできたコンテンツをこれからもつくって育て、育てて投資をしていかないとその価値を回収することはできませんので、その意味でもこの施設って非常に重要なことではないだろうかというふうに思います。

長くなりましたが、以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、遠藤委員、お願いしたいと思います。

○遠藤委員

遠藤です。よろしくお願ひいたします。

事務局の皆さんから、資料3のところの目指す施設像のところですね、これ、①②③とお書きいただいた資料もご準備いただいたわけなんですけれども、私、特にこの3つの像で、土台になってくるのが本当に②と③の部分じゃないかなと思っています。①のところもとても大事なんですけども、ここは全国のどこの施設でも皆さん切磋琢磨して取り組んでいらっしゃると思うんですけども、この②と③がとても大事な点。改めて事前に資料を見ながらいろいろ考えたときに、この複合施設に来たときに、仙台って何だろうとか、ああ仙台だなとか、東北って何だろうとか、東北って何なんだろうとか、何か問いが起こってきたり考えたりすることができる場所になっていることが重要で、そうでないと、ほかのすごく魅力的な施設と同じになっちゃうんじゃないかな

と思いました。

そういった点では、やっぱり仙台とか東北の独自性とかとんがりを、震災前、震災後にできたとんがりを生かしたり伸ばしたりするということがとても大事じゃないかと思っています。その点で②に「磨く」と書いてあるんですけども、もちろん磨くんですけども、そのとんがりを丸くしちゃ磨くではなくて、とんがりをさらに鋭利にするような、どこにもまねのできないとんがった部分をさらにみんなで面白がって伸ばしていくような、そういう視点も大事なのかな。だから、この磨き方ということもちょっと注意しないと、平らにしてしまうというんですか、そういったことにならないように。仙台って何なんだろうとか、東北って何なんだろうとかということをここの場に来ると考えたり、体現したり、発見したりすることで自分に持って帰れるみたいな場所になるのかなというふうにこちらは感じました。

そういった点では、震災の前と震災の後、直後から、仙台や東北ではやっぱり地元の方がいろんな活動、民間や市民の方がされているので、やっぱりそういった土台をどういうふうに活用して生かしていくか、ある意味、そこからさらに創造するというのを期待したい。場合によって外部者の方の関わりということが大事になると思うので、そもそもの地域の資源がどうよりとがっていくかということと、そこをどういうふうに他者とコラボレーションしながら創造していくかという二段構えが必要なのかな、と思いました。

ちょうど日曜日に、災害を100年後まで語り継ごうという仙台市の職員さんの有志のプロジェクト、プラス市民の防災の取組をしている皆さんの取組に私もお手伝いをさせていただきました。やはりそういった有志のプロジェクトが全国から人を呼んでいるわけです。あと、当日来られなくてもオンラインとか、あとはいろんな場面でつながっている、そういったグループや、団体や、企業さんが仙台にもたくさんありますので、本当にそういったところをどういうふうにさらにとんがって、磨いて、つながって、次の段階に創造していけるかというのはすごく考えていく必要があるかなと思っています。

そういった点では、③の青葉山エリアですね。今はやっぱり公演を見に旅行するというのが当たり前の時代になりましたし、私自身も、コロナ禍はオンライン生活をずっとしていたんですけども、最近、今までにないぐらい音楽とかホールやライブに行く機会があります。コロナの反動なのか、自分自身でもそれをちょうど体感しているところで、人間って何なんだろうと自分の体を通して考えたりしているところです。そういった点では、やっぱり劇場が、複合施設がどんなところであって、どういう立地で、あわせてどんな体験ができるかということを通じて、施設の中で行われるアクションだけじゃなくて、その周りに何があって何を体験できるかがその方に与える影響とか価値ってすごくあると思うんです。ですので、私はこの青葉山エリアというところの立地ということもすごく生かしていく必要というのはとても感じています。

そして、③のところネットワーク形成というのがありますね。仙台市内の施設、文化的施設、社会教育的な施設たくさんありますけれども、そういった場所について、この複合施設をつくるという視点を持った再評価をしてみてもいいのかなと思うんです。メディアテークとか、エル・パークとかアエルとかも複合になっていますけれども、複合でよかった点もあれば、私は結構課題を聞くことがあるんです、いろんな関係者の方

に、複合でやっぱり難しいところとか、本当に複合だからこそその価値が本当に提供できているのかということのを再評価した上で、今までやってきたことを教訓にしてこの施設をつくっていったらいいんじゃないかなと。ある意味、どう運営するかとか、運営形態などもその教訓が生きてそういう仕組みになるかと思しますので、そこの施設に関わっている仙台市民も多いので、ぜひ少し今後の教訓にするべく再評価をして、市内、市外のネットワークを生かして、本当に価値を生み出して、どんな価値を生み出してこられたのか、こられなかったのかということも考えていけるといいと思いました。

そして、少ししばらく開館までは時間があるので、どんなプログラムやどんな実施形態が必要か、リアルとオンライン、どういうものが必要かということも検討した上で、どんどんプログラムをつくっていく。そして今ある施設の中で、今年とか来年も継続的にもうプログラムは実施できる、それもその施設で上映できるといったようなプログラムづくりと実施を考える場ということも少しオープンな形でやっていっていただけるといいんじゃないかなと思っています。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、今野委員にお願いしたいと思います。

○今野委員

すみません、なかなか考えがまとまらなくて、ちょっとわけの分からない発言になるかもしれません。

何となく引っかかっている言葉というのが幾つかあって、1つは、さっきの説明の中にも出てきましたけれども、この施設だけで完結させないという文言なんです。例えば、それは震災メモリアルのところでも関わってくるわけですがけれども、実際に被災地にあらこちらに震災遺構ができています。そこのところとこの複合施設の中でどういう機能を持つことが一番いいのかというのが非常に悩ましく思っているところなんです。

それと、この施設だけで完結させないというふうなことになりますと、青葉山エリアのほかのところまでちょっと波及してしまうんですが、例えば博物館があり、緑彩館があり、そして宮城県美術館もありというふうなことがあるわけです。それらの機能をこの施設だけで完結させないようにうまく表現できればいいんだろうな、ただ、あまりほにょほにしてしまうと何となくコンセプトがない、メッセージがない施設になってしまうのも大変不本意なところになるのかなという思いがしています。

それと、もう一つありまして、これも先ほど来のお話の中に出てきているところなんです、特別な場所なのか、日常的な場所なのかという、ここも非常に悩ましく思っています。もちろん、コンサートだ、演劇だということになれば、それは当然のことながら観客にとっての特別な日になっていくのは間違いない。そしてまた、交流機能だ、人材育成機能だという、これは市民が作り上げていくようなそういう施設を複合させていこうとなると、それはどちらかという限りなく日常性に近くなっていく。これの兼ね合いをどう取っていくのかな、そして、その中に震災メモリアルの機能というのをどっちにウエートを持たせていくべきなのかというところに非常に悩ましく感じていま

す。

何というんですか、さっき本江先生おっしゃられた、つくり上げていくのは人なんだというところなんかは非常に重要なポイントだと思いますし、あと、ご紹介をいただきました、あまり機能を限定してしまわないスペースをいかに活用に向けた仕掛けができるのか、というところなんかも、この全体のコンセプトの中では非常に重要な位置づけになっていく可能性があるかなというように思っております。

1回目、以上でございます。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、佐藤委員、お願いしたいと存じます。

○佐藤委員

私は、前回のときもちょっとお話をさせていただいたかもしれませんが、仙台にもう長く住んで、仙台で音楽活動をずっとさせていただいて、仙台フィルが宮城フィルの時代からご一緒させていただいたりとか、ということがありますので、どうしても気がせいでしまって、ホールのほうで一体何をやるのかと、そういったところに気持ちが行ってしまうんですけども、今日は、この間もちらっと名前だけ出させていただきましたが、音楽による復興センターというところ、どんな活動をしているのかというのをちょっと改めてお話をさせていただきたいと思います。

復興センターは、震災直後に音楽家が全く演奏する場がなくなって、それをいろんな意味でサポートしていきこうと、それで助成金とか、そういったものの受皿になる組織が必要だというようなことからつくられた場所です。そこは、震災後もう1か月もたたないうちから演奏会というか、何かそういう演奏の場をつくってきて、もう11年たちましたが、1,000回以上の演奏会といますか、大体はアウトリーチ、こちらから出向いて行ってというような演奏であります。そういった活動をいまだに続けています。その活動の中には、今お話しした、こちらから演奏家が出向いて行って、いろんなところに行って演奏するという、私も実は、今年の1月には会津若松の、大熊町から避難してきて会津若松に定住を決めた方々の復興住宅で演奏させていただいたり、そういったことがいまだに、来年もまたお願いしますと言われていたりとか、続いています。そういう活動を復興センターで計画をしながらそういうアウトリーチ的なこと、それから、あとは、今もお話ししたように復興住宅に毎月定期的に出向いて行って、そこの方々と合唱したりお茶を飲んだりだとか、まちカフェというような活動もいまだに続いています。

それと、最近は、若い演奏家が自分で映像を撮って、それも日本の歌とか聞きなじみのある歌の演奏を撮って、それをオンラインで配信をします。それを見ながらその歌を聴いている方々は一緒に練習ができるような形での映像をつくったりとか、そういった形の活動をいまだに行っております。主に外に出て行ってということが多いため、この新しいホールを考えたときに、先ほど梶委員からの東京文化会館もありましたように、外に出ていく活動というのを今、すごくたくさんいろんなことをやっていますが、人に集まってもらうというようなことがあまり多くないのかもしれませんが、復興住宅の方々がこの新しいホール、それから新しい震災メモリアル拠点の複合施設においでになって

いただく、来てもらうという、そういう仕組み、仕掛けというのは必ず考えていかないと、やっぱりホールがただのコンサート会場だけになってしまう。それだと、今後非常に残念なことにもつながっていくような気がします。

ですので、そこに集まってもらう、そういった仕組み、仕掛けを考えていったときに、やはり若い世代の人たちに私なんかは集まってもらいたい。そういったところで、ワークショップというのがありました。私はオペラをやっているのですが、オペラのワークショップというのとはとてもすばらしい企画だと思うんです。子供たちが演奏して、先ほど絵を描くのもいいという話がありましたが、子供たちだけではなくて、大人の方々が舞台の裏を制作するというので入ってくだされば、世代を超えて一緒にいろんなものをつくっていき、そういった場にこのホールがなっていくとすごく私はうれしいなというふうに思っています。

複合施設としていろんなことをしていく中で、計画されていく中で、今お話をした「音楽の力による復興センター・東北」というところがいろんな意味で両方のつなぎの役を果たせるのではないかと、そこにはいろんな人材やネットワークがありますので、そこを大いに活用していただくと、音楽家まで幸せになるんです。この地元の、そういったようなことでひとつポイントを置いていろんなことを考えていただけると、私としてはありがたいなと思っています。

すみません、長くなったんですが、私は今、保育系の、保育士とか幼稚園の先生になる資格を取る学校で音楽を教えているんですけども、実際に幼稚園とか、今、認定こども園とかというのが増えてきているんですが、やはり未就学児の親の方々が幼稚園に来て一緒に遊びながら幼稚園の先生とお話をするという機会をととても欲している方がいらっしゃるんです。ですので、先ほども核家族という話があったかもしれませんが、小さい子供を抱えている親からすると、集う場というんですか、そういう場というのがとても大事であって、そういう方々がこの複合施設のほうにも何か足を運んで、それで、目的はいろいろで構わないと思うんですが、そういう同世代の悩みを抱える親同士が交流を持てるというようなことも1つ大切なことではないかなと思っています。

もう一つ、最後ですが、新しいホールの音響のいいホールという話がずっと出ていますけれども、日曜日に私、南相馬の文化会館というところで演奏会があって歌ってきたんですけども、とても響きがいいんです。ソロで歌って、とても私は気持ちいいと思って帰ってきたんですが、そういう響きのいいホールというのは人を育てていくわけですね。ですから、そこで演奏した人たちが中心になるかもしれませんが、そういった意味でいろんな幸せな思いを持ってもらえる人を育てていくということがとても大切なことだと思いますので、そういった意味でも音響に適したというか、音響がすばらしいホール、そういったホールをぜひともお願いをしたいと思っています。

以上です。ありがとうございます。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、本杉委員、お願いいたします。

○本杉委員

本杉です。

今までお話を聞いてきたのと、それから今日いただいた資料を見て、よくまとまっているなとまず第一印象として思いました。それを踏まえて、私のほうから二、三コメントさせていただきたいと思います。

まず1点目は、ネーミングはやっぱりとても大事だと思うので、どこかでネーミングをちゃんと考えたほうがいいんじゃないかなと、それがまず1点目です。これまで、音楽ホールとか、あるいはメモリアル拠点とかという言い方をされていて、今度新たにつけられた名前が、国際センター駅云々という名称で、何か再開発みたいな名前になっちゃっていて、もうちょっと活動とか、あるいはこれからの施設のイメージにつながる新しい名前というのが大事じゃないかなというふうに思うんです。

先ほど、本江委員のほうからメディアテークのお話が出ましたけれども、メディアテークも新しい名前がついたことによって、今までみんなが持っているようなイメージじゃないものへと建築の力と共に変化して受け入れられていったんじゃないかなと思います。ですので、どこかでいいのでネーミングを、我々も含めて、もちろん市の方たちが中心になってネーミングを考えていく必要があるのかなというのがまず一番の印象として思いました。

それから、2点目はキーワードです。今日、ここに3点の目指す施設像というのをいただいています。その上に基本理念という中でキーワードが幾つか並んでいます。このキーワードの中に1つ加えてほしいなと思うのが、「参加」という言葉で、前回出ていなかったからなのかもしれませんが、やはりいろいろな方々が、特に市民が参加することとはとてもこの施設にとって重要なことだというふうに思いますので、「参加」という言葉をどこかで加えることで活動のイメージも変わっていくのではないかなと思います。

その下の3つの目指す施設像という中では、ちょっと私も劇場とかの関係が強いので、ホール寄りの内容になってしまうのかもしれませんが、3つじゃなくて、4つほど、どんな施設なのかなというのを自分なりに考えてみました。梶委員から、これからは舞台芸術のための施設だけじゃないんだという言い方をされていましたが、やはり何といても、根底にある、幹になるところは当然そこにある、と思っています。優れた質の高い作品や公演活動を続けていくということです。続けていくということです。やるということじゃなくて続けるということがすごく大事だと思うし、それから、ここにも創造という言葉がありますけれども、独自のもの、独自の活動、独自の創作というものを、それも続けていくということが大事です。それらを通して、初めて鑑賞とか交流とかといったことが生まれてくる、意味を持ってくるんだと思うんです。だから、舞台芸術のための施設なんだという認識は非常に重要で、この軸がぶれないようにしてほしい。

いろいろな方々に市のほうから聞いてくださって、特にMICEの方たちからもいろいろなお意見が出ているようですけれども、何といてもここは文化芸術の、舞台芸術のための施設だと、それを軸にしてこの施設ができるということが大事であり、あるいはメモリアルのための施設だということが大事で、そこをぶれないようにしっかりとって考えていくことが大事だなと思います。

その上で、もしこういところでMICEの人たちがどうしても使いたいとかという

ことであれば、それはそれでまた話はあっていいのかもしれませんが、とにかく軸はそこにあるということです。それと、やはり重要なのは市民文化活動のための施設だということです。ここには日常的な練習活動から発表までの施設であるわけで、先ほど今野委員が「特別な場なのか、日常の場なのか」というふうにおっしゃっていましたが、その両方の場だというふうに僕は思っています、特別な場でありかつ日常的な場だと、この両方が一緒にあるということが非常に意味があることで、かけ離れた全く逆方向の施設なんじゃないんだって、それらが同時にあることによって市民が生き生きとこの場所を楽しめるし、文化創造活動というものが成り立ってくるんだと思っています。それらを通して交流というものが初めて意味を持つてくると思います。特に、今日、梶委員からもあったように、若い世代の文化活動支援というのはとても重要で、その人たちを支援していくためには、中間的といいますか、リーダーになる、活動の中核になって働いてくれる人たちが必要だということだと思っています。

それから、もう1つ。やっぱり梶委員がおっしゃっていた広場としての施設、これもとても重要なことで、ここは仙台市民だけじゃなくて、市外・広域からも来てみんなが楽しめる施設、親しめる施設、目的なく来られる施設、文化活動に限らず、あるいはメモリアルの活動に限らず交流できる施設であってほしい。それでこそまちにとって非常に大きなプラスになるというふうに思っています。

僕が初めてヨーロッパに勉強に行った先はドイツだったんですけども、ドイツと日本はちょっと似ていて、昼間ロビーまでは行けるんだけど、ロビーから先のホワイエには入っていけないというのがドイツの劇場でした。一方、その当時でさえも、イギリスの劇場は、客席の入口ドアのところまで入っていけるんです。厳重に扉は鍵がされていますけれども、そこまでは誰でもが入っていける。ランチタイムになると、ビュッフェみたいところがオープンして、まちの皆さんがランチに劇場に来るというような姿、あるいは、夕方になるとバーになって、そこがまちの人たちのパブになるというようなそういう日常的に開かれた場所になっていました。

最も有名なのが、ロンドンのテムズ川にあるサウスバンクの散歩道です。フェスティバルホールがあって、クイーンエリザベスホールがあって、ナショナルシアターがあって、もうちょっと東に行くとグローブ座があって、テート・モダンがあるというような場所です。初めて、四十数年前に行ったときは、例えばフェスティバルホールから帰りの電車に乗ろうとすると、非常に暗い中を寂しく帰って行って、ちょっと怖いなと思ったぐらいだったんですけども、今行くと本当ににぎやかで、土日に限らず常に散策している、人が集まる場所になっています。

あそこまではすぐにはできないと思いますし、場所も違うので何とも言えませんが、今回計画される場所を40年かかっても、50年かかってもいいからとにかくそんな場所にしていけることができないだろうかと思っています。前の委員会のときにも、歴史ある自然の多い場所だというその認識の下にこの地区を計画すべきだという話がありました。もっともだと思います。その認識の下にぜひ、この施設ができることをきっかけとして、川沿いの、あるいは西公園につながっていく、まちにつながっていく場所に、長い時間かかってもいいので、むしろ長い時間かけなきゃ駄目なので、変わって行ってほしいと思う。その意味で、広場としての施設の在り方は、この場所だけで考えるんじゃなくて、

もう少し広く考えていただきたいなと思います。

もう一点が、社会機能としての施設という意味です。これも再三言われていることですけれども、赤ちゃんから高齢者まで、あるいは障害者から弱者、外国人まで広い人を含めたインクルーシブな施設としてあってほしいなと思います。例えば、あのベルリンフィルでさえも、地域のための活動というものを続けています。ここにも、地域のことを書かれていますけれども、仙台市全体をやろうとすると、それを1つの施設でやるというのは無理な話なので、やはり施設ごとに分担といいますか、いろいろな施設が分担し合って、ここにも書いてあるネットワークを使って協力し合いながらやっていくということが大事じゃないかなと思います。

ベルリンフィルで例えばよく知られているのがヤングヒーローというもので、比較的貧しい地域の若い、小学生ぐらいですかね、子供たちをベルリンフィルのメンバーが指導して合唱とか楽器演奏とか教えていたりするんです。そういうものとか、あるいはベルリンフィルじゃなくてHAUという、Hebbel am Uferという劇場群、グループがあるんですが、そこも連携し合って別な地域を担当しています。ヨーロッパはいろんな地域があるので、移民の人たちもいますし、地域ごとにいろんな特性を持っているので、劇場が場所ごとにいろんな役割を分担しながらやっているという、そういうことも必要じゃないかなと思っています。

これは前も言ったかもしれないけれども、劇場を最も必要としている人は劇場に来ない人だと思っていて、そういう人にこそ来てほしいと。垣内委員も言っていましたけれども、その人たちに届くような活動も大事じゃないかなと思っています。

もう一つ大事な3点目は、それらを通して仙台のまちが、都市が活性化していくということが望まれているということです。文化芸術とかそういったものって、余暇活動という言い方もされ、余った時間で何かやっているイメージを持たれがちですが、そうじゃない。原始の時代からどんなに食べ物がなくても、苦しいことがあっても、歌とか踊りとかは我々の生活と、人間の生活と切り離せないものとしてあったというふうに思うんです。それはいろんな原始の壁画などにもよく描かれていることです。それを思うと、確かにお金のかかる施設なんですけれども、そう言った意味で反対をする人たちもいるとは思いますが、でも、決して自分の子供や孫が文化とか芸術をするなという親とかおじいちゃん、おばあちゃんはいないと思うんです。音楽をやっていたら、それを楽しんでいる姿を見ればうれしいし、芸術に親しんでいればそれはうれしいと思うのが普通でしょう。ただ、それがすぐ生活に直結しにくいという、飯の種にはならないというような言い方をよくされるように、そういう点で批判的なことは言われるのかもしれない。けれども、やっぱり人間にとっては基本的な生活の一部だと思います。ですから、そういった人間の安息とか落ち着きというものを追求していったときに、こういった施設はぜひ必要だと思うし、それが都市の中であってこそ都市としての誇りをつくっていくんじゃないかなと思います。そこにつなげていける、そういう場所になってほしいなと思います。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、オンラインでご参加の渡邊委員に次、お願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○渡邊委員

よろしく申し上げます。

皆様のご意見、すごく勉強になるなと思いながら聞かせていただきました。私のほうから、ちょっと手短かに4点ほど、主に資料を拝見して気になった点をお伝えさせていただきます。

まずは、資料①の「誰もが集い」というところ、遠藤委員からもこれはよくある文言だみたいなお話はあったんですけども、施設が具体的に活躍していく時期って2030年以降になってくると思うんですけども、SDGsの目標が成熟化していく時代になってくると思うんですけども、そういったときに、誰もがというときの言及が、今、ほとんど世代間の話がメインかなと思っていまして、子供からお年寄りまでがというようなことだけでいいのかなというのが、ちょっと次世代に向けて物足りない点なんじゃないかなというふうに私としては思っております。

弊社で運用しているような場所って、Z世代の方とか若い方いっぱいいらっしゃるんですけども、ジェンダーフリーの問題ですとか、多国籍の方々への対応の問題ですとか、そういったところを結構気にされる方が増えてきているなという印象を受けまして、やはりこれから新しくつくる施設なので、そういった次世代の多様性というものに対して具体的にどういう対策をしていくのかというところ、具体的に盛り込んでいくということが非常に大事になるんじゃないかなと思います。

もちろん、ホールだったりとか、そういう展示施設においてもすごく大事な視点ではあるんですけども、例えばトイレだったりとか、そういう設備面のことに関して具体的にどんな対策をしていくのかというのは、何かこれからの時代にとってすごく重要な点なので、ぜひそういった点の方々とか、東北大学さんを中心に、本当に国際的な方々入ってきていると思いますので、そういったところの意見も踏まえながら、誰もが使いやすい施設って本当にどういうものなのかということ議論しながら具体的に実装していくというような視点はこれからすごく大事なんじゃないかなというふうに考えております。

2点目ですが、やはり梶委員からも芸術のコンテンツの、市民を巻き込んだコンテンツづくりに関して言及がありましたけれども、皆さん言っていっぱいありましたけれども、それを誰がどう持続的にやっていくのかというところが本当に重要になってくると思いますので、その点において、ある程度収益化を目指しながら、持続可能な運用方法というのはどういったところなのかというのを考えていくのは大事な点なんじゃないかなというふうに思います。

市民の福祉として、いろんなサービスを提供していくことってすごく重要だとは思いますが、やはり人口減少時代になっていくので、そういったところを持続可能性というところの具体的な施策というのは非常に重要なことというふうに私としては考えました。

そういったところ、市民のソフトパワーをどう生かしていくとか、あと、運営体制に対して入りやすい補助線づくりですとか運用方法の検討というところが重要で、従来

型の施設だと、どうしても特定の団体に指定管理がおりて、そこを中心にやっていくみたいなのがメインになってきていると思います、この施設もきっとそうになっていくんだろうなと何となく思うんですけれども、それだけじゃなくて、幅広い市民団体が幅広く、フリー・オープンに参画できるような仕組みというのはどこにあるのかなというところ、次世代型の在り方を模索していくということ、重要だと思いますし、オンラインの活用だったりということも、そこにうまく入れていけるとすごくいいんじゃないかなというふうに考えました。

3点目ですね、私、石巻市におりまして、割と震災復興ですとか、震災からの歩みなどを近いところで、ずっと10年間、目にしてきたわけなんですけれども、やはり震災ですね、被害も甚大で、大きい被害、世界的にもまれに見る被害が出たと、広範囲で出たということに関して、国際的な記憶もどんどん薄れてきているところだなというふうに思い、そういったところの記憶をどう残していくかということは非常に重要であると思いますし、物質的にどうアーカイブしていくかということも非常に重要と私も考えております。

それに伴って、どう復興してきたかみたいなのところも非常に重要だと思っておりまして、その中では、単純にハードや施策だけではなくて、本当に市民力というか、多様な民間の主体ですとか、多様な個人の方が東北の復興というところには関わられてきて、ボランティアもそうですし、企業さんもそうですし、いろんなそういうソフトパワーが関わりながら復興してきたというところは、ぜひアーカイブの視点としてすごく大きい、重要なところだと思いますので、そういったところも体験して、それが未来につながっていくみたいなの、そういう見え方ができるような、さらに、じゃそれを生かしてどう発展的に社会をよくしていくのかということに関して活動が促進されるような機能は非常に重要なんじゃないかなというふうに考えております。

私からは以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、最後に本江委員、お願いしたいと存じます。

○本江委員

本江です。

先ほど、まとまったお時間をいただきましたので、手短にしたいと思いますが、今のお話を伺っていて、今野委員の「特別なのか日常なのか」という問いかけがあって、どっちに重きを置くのかと。本杉委員から、「いや、それは同時にやるんですよ」というふうにおっしゃって、僕もそのとおりだと思います。と思いますが、非日常と日常が同時に見えているということはやっぱりあまりないので、今はすごく日常的だけれども、ある瞬間そういう特別的なものになる。あるいは、時間で転換するとか、あるいは空間で、裏のほうにいたときにはスウェットにTシャツで汗だくだった人が、楽屋を通過して板に上がると夢のようなお姫様と偉大な王様になるというのが面白いので、何か空間が動くとすごくギャップが大きくあって鮮やかに現れるということだと思いますし、メモリアルで言えば、普段はアーカイブのところで地味に資料を読んだりしているのかもしれないけれども、でもそれが毎年3月11日の日には居住まいを正したフォーマルな

儀式が行われて、みんなの強い記憶を喚起する、襟を正すような空間になるという、時間と空間の両方を使いながらハレとケが転換する、それが鮮やかに行われるということが記憶を埋没させない、常にダイナミックな動きをつくり出すということにつながるのではないか、そうした建築であるべきだし、そうした運用ができるといいのではないかなというふうに思います。

第1回の時に、広島のパラレル記念公園は、普段はすごい穏やかな公園なんだけれども、8月6日にはビシッと特別な空間になりますというお話をしましたが、ああいう感じのようなことがここでも行われて、そのめりはりがあることで、いわば呼吸が行われて、忘れないで、次のことに続いていく。ステージの熱狂とそれをつくるための地道な努力とが往復していくというような、何かそういう動きのある場になるんだろうなというふうに思っております。

それからもう一つ、ハレとケというふうに言ったけれども、ここは災害のメモリアル施設であるので、第三の時間、第三の場面がある。それは次に来る非常時のときですね。どこかで、あるいは仙台で大きな災害が再び起こったとき、あるいは仙台でなくてもどこかで起こって、それに対して仙台が何らかのコミットをしようとするとき、あるいは港委員が最初に言われたように、日常の中に非常の事態が折り込まれてしまっているようなのが現代だとすると、それが何かのときに裂け目が生じてそれが現れてくるようなとき、例えばBLM（ブラック・ライブ・マター）運動のようなときはそうだと思いますけれども、そういうものがあつたときに、仙台が、市民の人たちがそうした非常時にどう対応するのかというときに、ここを使うんだと思うんです。それは、災害のメモリアルがあるし、それについての知見があるし、みんなで集まって話し合うための会場もあるし、それを集中して感じるためのスペースもあつて、広場もあつて、何かハレとケと、さらにもう一つ、ハレとは違う特別な時間のときに、ある役割を果たすべき施設であるという構えがあると、ただのエンターテインメント施設ではない、震災を機につくられたそういうまちなのだと、仙台は、ということをしてステートメントとして言える施設になるんじゃないかなと思います。それが具体的にどんな造形や建築のデザインによって実現されるかということは、まだ僕もこうすればいいですと言えないんだけど、そうしたビジョンを求めていくということがあるといいのではないかなと思います。

私からは以上です。ありがとうございます。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、ここで、一旦休憩に入らせていただきたいと思います。会場の全面換気をしたいと思います。先ほど、二巡というように申し上げましたが、大分時間を超過してしまいましたので、次の資料3に関するご意見と併せて、もし言い足りないことですか、ほかの委員の発言を踏まえてのことがあれば、資料3に関する発言と併せてお聞きするという形にしていきたいと思います。

それでは、15時5分まで休憩とさせていただきます。

(休憩・再開)

○金子文化観光局長

それでは、再開いたします。

ここからは、先ほど説明いたしました資料3に戻りまして、本施設としての理念についてご意見をいただきたく存じます。

また一巡したいと思いますが、その際に、先ほどご意見いただきました資料4を中心とした話題について、ほかの委員のご発言などを踏まえての意見などがもしあれば、併せてその際にお話しいただければと存じます。

なお、この資料3に関する部分でも、この場で結論を定めるというようなものではございませんので、今日は、理念につながる資料以外の別のキーワードですとか方向性など、あと、先ほど本杉委員からもお話ありましたけれども、複合施設の名称につながるようなヒントというようなことも含めてご自由にいろいろご意見いただければというように考えております。それで、先ほどと同じ順番でいきたいと存じますが、まず、港委員からお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

○港委員

各委員からのご提案、大変勉強になりました。私のほうからは、実はまだ整備予定地のほうを見る機会を得ていないので、頂いた資料から想像しながら。仙台には何度か足を運ぶ機会ありましたけれども。

1つは、大切なこととして、先ほどからこの場所の環境、特に風景、景観ですね、その風景や景観を尊重しながら、その場所と矛盾ないような建築、そしてその建築が育んでいく様々な事業という一つの連続性と言っていいと思うんですけども、場所と建物とそこで行われる活動が矛盾ない形で一つの連続性を持っているということはとても大事なんだろうと思います。

そういう意味で、空間的な連続性だけではなくて歴史的なつながり、その2つを1つの言葉で誰もが分かるような理念、そしてネーミング、多少ハードルは高いのかもしれませんが、それとロゴも含めたビジュアルコミュニケーションのための一連のツール、それを一体化して考えていく、これが大切なんだと思います。

本杉委員のほうからも、ネーミングを考えることは本当に大事だと、やはりネーミングというのは、この活動に関わる人だけでは当然ないわけで、広く市民、そして様々な人がそこに意識を共有できるような、そのための機能もあるわけですので、早い段階でネーミングを決めて、そのネーミングが定着していくことが市民全体、関係者全体の、最初は様々な批判、対立があっても、最終的にはそのネーミングを通してみんなが同意する、力を合わせてやっていくという、そうなることが大切だと思います。

インクルーシブについても、広場としての機能、施設についても全て同じことなんじゃないかと思います。そういう意味で、2030年までの時間というのは、長いようでそんなに時間があるわけでもないような気がしますし、一つ一つのプロセスを大切にしていかなければ、そのためには何度も何度も説明会などを開いていかなければならないと思いますので、ステップ・バイ・ステップ、どのステップも大切であろうというふうに思います。

もう一つは、日常と非日常の特別な時間との関係ですけれども、先ほど本江委員のほうから、第三の時間という言葉で出されたのが、これは、今そこにある災害の可能性で

すよね。いつ何時また大きな地震が起きるやもしれないですし、そうしたときに、大きな施設というのはそこが避難場所にもなるわけですから、そういう意味で、今そこに潜在している時間を織り込んでおくということ、それは建築ではなくて日々の活動の中に織り込んでいくこと、それが仙台にできる新しい施設の一つの大きな特質になるんじゃないのかなと思いました。ちょっと抽象的なんですけれども、理念を考えていく際には、未来をも織り込めるようなそうした理念が必要になるんじゃないかなというように思います。

もう一つは、繰り返しになりますけれども、この施設は、当然東北だけではなくて日本全体、そして世界全体から注目を浴びる施設になることは間違いないわけでありまして、こけら落としの公演や芸術監督の任命も含めて、一つ一つが本当に、さっきも言ったように矛盾なく1つのつながりを持ったそういうものになってほしいなと思います。

以上になります。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、会場に移りまして、川内委員、お願いいたします。

○川内委員

川内です。

委員の先生方のお話をいろいろ伺っていて、ああそうか、と思った事が、幾つもありました。例えば、佐藤委員から出していただいた未就学児という、いわゆる核家族化をしている中で、そういう人たちが気軽に来られるような場所が必要というお話がありましたけれども、考えてみたら、実は私自身がそこに該当するんですよね。現在、私の娘は5歳で保育園に通ってしまっていて、休みの日にどこかへ行くとすると、全て子供中心に決まってしまう。一応仕事柄、博物館みたいなところや、震災の伝承施設なんか行ったりもするんですけど、やはり子供はあまり見たがらない。「もう行こう、行こう」となって、「じゃパパ、一人で見ておいで」という話になっていくんですけども。でも結局、小さな子供がいる家庭は、そのように子供中心の動き方をするわけで、そういうのを面白くないという子供と、それを見たい父親が同じ空間にいることができる、まさに先ほど本江委員がおっしゃったような、いろんな空間が入れ子になっているような空間って、確かに大事かもしれないなと思ったんです。

そういうことを、自分に置き換えて考えたんですが、その上で、資料3の施設の「理念」について考えました。なかなか難しいなと思ってずっと考えていたんですけども、それについてなるほどなと思ったのが、先ほどの今野委員の問いかけです。特別な場所なのか、日常な場所なのかという中で、本江委員に言わせると、それは可変的なものなんだというお話というのは、ああ、なるほどな、そうだよなと思って。やっぱり、日常の場であり特別な場であるという、そこは可変的であるべきなんですよ。資料の中でもご説明いただきましたけれども、いろんなご意見の中で、ある種空白のような、そういう今の段階でカチッと決めずに、余白が残るような形でというご意見がどこかあったと思うんですけども、やはりそうした余裕は持たせておく必要があるなと。この懇話会で理念としては作ったとしても、全てのコンセプトをガチガチにしないということ。皆さんが自由に動ける場ということを一とつ想定しておく必要があるだろうと。

その上で、理念としてどのように考えるかというときに、今野委員がおっしゃった特別な場所なのか、日常の場所なのかということもそうなんですけれども、前回、今回と上がってきたキーワードについて見てみると、この施設が複合施設だということとも関係すると思いますが、ある種、一見すると相反する価値を持つ言葉が幾つか入っているのかなという気がするんです。例えば、今日の話も出てきましたけれども、劇場の在り方として、やっぱりきちっとした施設を、舞台芸術の施設を造って、そこに人が来て特別な時間を過ごしていくという、そういう機能が必要だと。そのとおりだと思います。その一方で、どんどん施設の外に打って出る機能を持たせる必要があることも述べられています。アウトかインかという、ここはまた相反していますし、あと、例えば「知る」ということと「つくる」ということも、ある意味では相反した考え方です。「知る」というのは自分の中に入れていくことですし、「つくる」ことは自分の外に出していくことですので、相反している部分があります。こうした、相反する価値が同居しているようなご意見がたくさん出ていて、多分それがこの施設に持たせる理念としては重要になってくるかなとも思います。

あと、このキーワードとして上がっている中で言うと、「世界的」などというものがあるんですけれども、一方で、やっぱりこの仙台市民に寄り添った部分も必要です。グローバルとローカルという相反し方もあると思います。あと、私も今日、アーカイブの話を見せていただきましたけれども、アーカイブというと「過去」を残すということで、一方でやっぱり「未来」志向でつくっていく、これもまた相反する部分があります。

これをじゃあどのように、相反するものを同居させながら、かつ1つの空間としてつくっていくか、なかなかそこまではまだ考えが及ばないんですけれども、そういう意味では、先ほど、遠藤委員がおっしゃった点にちょっと1つヒントがあったかなというふうに思っています。つまり、ここに来たら「仙台って何だろう、東北って何だろう」という問いが生まれる場であることが大事だということです。つまり、この相反する価値観、「知る」ということと「つくる」ということの間にある「問い」というものが生まれる場、それをつなぐものがあることによって、相反する価値が同居できるんじゃないかなと。そういうものをつくり出せるような場というものを考えたいんですけれども、それが具体的にどういうものがイメージできるかというのが、少しちょっとまとまっていない。ちょっと言いっぱなしの話になってしまうんですけれども、何かそんなことを考えました。以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

すみません、先ほど申し上げればよかったんですが、この後ご予定のある委員もいらっしやいますので、本日、15時40分くらいまでとさせていただきたいと存じまして、一通り皆様からご発言いただきたいと存じますが、本日言い足りなかった部分ということがあれば、別途事務局のほうまでご意見をお寄せいただければと思いますので、そのことをお含みおきいただきましてお願いします。

すみません、それでは、垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員

手短に2点。

まず、近年の動きとして、政府が全てを提供する、サービスを提供するということはありません。もうそういう時代は終わった。今、ローカルガバナンスということで、公でなければできないことを、そういうサービスを提供するということになっております。ですから、この施設についても、ほかの民間では提供できない、ほかの施設、既存のものでは提供できないようなサービスや活動を提供するということがまず1つ大前提にあるかなというふうに思います。

だから、コスト、劇場というのは、例えば阪神淡路大震災でできた兵庫芸文センターですけれども、当時200億以上かけて建設して、その後、維持費は、オーケストラもありますので、15億ぐらい毎年かかっています。これに対して、県民の人たちは非常に大きな社会的便益を感じていまして、多分10倍ぐらいのメリットを感じている。そうであれば、これはゴーなんです。だから、そういうコストを上回る便益を、メリットを市民の方々に与えるような施設として組み込まないと、多分ちょっともたないんじゃないかという心配が私の専門から言うとあります。

2点目は、時間がないので急ぎますが、人材育成、これとても重要なんですけれども、ここも全く同じでして、劇場が全て抱え込む必要は全くないので、仙台にはたくさんNPOさんとか活動されている方々もいらっしゃる、アーティストも多い、そうであれば、そういった方々を組み込まれるようなそういう柱立てでいかれたらいいなというふうに思います。

資料3について言うと、いろんな言葉がありますが、私としては、誰もがというところ、次世代へという、次世代の負の遺産にならないというところ、それから市民協働のところ、市民主体というんですか、やはり市民の方々が中心にならないと、そこに公がサポートするという形のほうが望ましいんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

では、遠藤委員、お願いいたします。

○遠藤委員

基本理念のところということで、いろいろ考えたときに、機能面的な言葉を入れるのか、それとも状態目標みたいな言葉を入れるのか、あと、来た人がこう感じてほしいみたいな言葉を入れるのかとか、いろんな切り口で考えられるなと思いました。震災のメモリアルと音楽ということがベースになった施設でもありますし、私も防災とか復興の活動をしていると、まず論理的なところに行く前に、やっぱり一人一人が自分に正直になって感じるというところが本当に大事ななと思うんです。感じたことを表現したり、しゃべっていいのかなとか、まだまだ仙台とか東北の皆さんといろいろ災害の関係でお話する機会があっても、しゃべっちゃ駄目なのかなと、感じたことを言っちゃ駄目なのかなという空気も私もすごく感じています。

ただ、何か根源的なところに、人間の根源的なところに立ち戻って、何か一人一人が感じる、事務局の皆さんが書いてくださった理論的な言葉もいいなということで、大変悩ましく感じておりました。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、今野委員、お願いいたします。

○今野委員

じゃ、手短かに。

まず、③の資料のところでは、私、個人的にはつなぐという言葉、これ、つなぐがいいのか、それとも結ぶがいいのか、そこはちょっと悩ましいところなんですけど、例えばつなぐということも、時間であったり、世代であったり、人と人であったり、あとは思いであったり、地域と地域を結びつけたりと、いろんな意味での表現というのができるのかな。この挙げられたキーワードの中では、創造とか学びというところがなかなかちょっとこの中には含まれてこないのかなというふうに思っています。

それと、必ずしもこのコンセプトのところ、理念のところだけで全てを表すのかというふうなところで考えていきますと、例えばハード面なんですけど、杜の都、緑というのは仙台の代名詞です。例えば、さっきの事例の中にも出ていましたが、屋上を本当に緑にして、青葉山との景観を一体化してみせるというふうな取組なんかは、仙台らしさを表すことができる方式だと思いますし、あとは、M I C Eで、例えば国際会議があったときにテントの部分がなくなりましたというご意見もあるわけです。そういったところを、例えばエントランスだとかロビーのところ、そういうふうな活用の仕方をできるような仕掛けをつくっていく、それによって国際性、世界とのつながりみたいなものも表現できるんじゃないかなというふうに思っています。

以上でございます。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、佐藤委員、お願いいたします。

○佐藤委員

私は、やっぱり次世代へとか、育てるとか、それをキーワードに考えていたんですけども、人を育てたり、まちを育てたり、文化を育てたり、そういう場であってほしいと思いつながりながら、アーカイブによって未来を考えることができる、そういう人を育てていくというか、何かそんなところが私の頭から離れずにいました。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、本杉委員、お願いいたします。

○本杉委員

この基本理念のキーワードで、僕が3つくらい挙げるとすると、例えば「誰もが」というのは「みんなが」でもいいし、「誰でも」でもいいんですけども、「みんな」という言葉も震災以降よく使われるようになった言葉のような気がするので、みんなというのでもいいかなと思ったりします。あと、「創造」という言葉はとても大事なもので、それは尊重したいなと思うし、先ほど言った「参加」というのもいいなと思っています。そういうものを踏まえて、「つながっていく」とか、「次世代へ」とかという言葉が出

てくるんじゃないかなというふうに思っています。

以上です。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

それでは、本江委員、お願いいたします。

○本江委員

本江です。

基本理念のところでは、今までも仙台市でメモリアルの委員会をやってきていて、最初の宮原委員長のとときの震災復興メモリアル等委員会でも基本理念で書いていて、読みますが「時を経て 世代が替わっても 災害から命を守るために 仙台市民一人ひとりが 東日本大震災の記憶と経験を 未来へ 世界へ つなぐ」というのが冒頭の文になっていて、その後作文があります。なので、「つなぐ」とか「記憶と経験を」「命を守るために」というようなキーワードが入ってくるなというふうに思います。

その後に解説文みたいなものがあるんだけど、そこには、知っていたのに忘れていて、大きな被害を出したという反省があるというのが書いてあって、そのことは大事なことだなと思っています。なので、今、資料3のところの上がっているキーワードは、やっぱりちょっと「キラキラ」キーワードで、反省とか、このままだとぼんやりしていると危ないですというような危機感がちゃんと入っていないといけないんじゃないかなというのはちょっと思いました。ややナイーブな感じがする。

もう一個、この懇話会の直接前身の一つになりました中心部震災メモリアル拠点検討委員会というのが令和2年まであって、これは、哲学者の野家先生が委員長だったんです。最終報告の序文を野家先生が書いておられて、その中の一番最後のところがちょっと印象的なので読みます。最後の段落です。「震災直後に、アメリカの歴史家ジョン・ダワーは、歴史を振り返ると突然の災害や事故のあとに『すべてを新しい方法で、創造的な方法で考え直すスペースが生まれる』と語っていました。それに続けて『しかし、もたもたしているうちに、スペースはやがて閉じてしまう』とも警告しています。忘却と風化とは、このスペースが閉じることを意味します。ここに提出する報告書が、ほとんど閉じかけているスペースをこじ開け、押し広げる心張り棒の役目を果たすことを願ってやみません。」というふうに結んでおられて、やっぱり東日本大震災が何か特別なスペースをつくったというのは、被災したみんな、つまり日本にいたみんなですけれども、感じたところだったろうと思うけれども、その何か特別な場がみるみる閉じていくという感じもまた共有しているところだと思います。

我々は、直接の当事者でかなり濃いところにいるので、まだスペースが閉じ切らずにいて、今のような議論ができていますけれども、ぼやぼやしているとあっという間にそれは閉じてしまう、だから心張り棒が必要だというのが野家先生の語りで、「心張り棒」がキーワードだと言うと、説明がたくさん必要でちょっと大変なんだけれども、何かこの言葉をそのままというよりは、ニュアンスとしてある種の危機感と忘れてしまう、風化してしまうということに対する危機感があり、それに対する抵抗としてこのプロジェクトをやっているのだということが、ナイーブになり過ぎないような形で理念に織り込まれているといいなと思います。何がいいかというのは、まだ案はないんですけども、

態度としてはそういうことを思いました。

以上です。ありがとうございます。

○金子文化観光局長

ありがとうございました。

委員の皆様、今日は様々な大変いいご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

先ほど申し上げましたとおり、ちょっと時間の関係もございますので、本日の議論はここまでとさせていただきます。何かございましたら、事務局のほうまでお申しつけいただければと思います。

本日予定しておりました青葉山エリアに立地する施設としての在り方の議論、資料5の部分につきましては、次回に移すということにさせていただきたいと存じます。

また、今回は、それに加えて、音楽ホール、メモリアル施設それぞれの概要、複合施設の整備方針などもテーマに議論していきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、進行を司会のほうにお返しいたします。

○司会

委員の皆様、大変長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

次回の懇話会でございますが、来年1月下旬から2月上旬の開催を予定しております。

それでは、以上をもちまして第2回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を終了いたします。

本日は、誠にありがとうございました。

以上